退職者の声

※多　佐藤二美さん

東北大学に就職して42年がたちようやく卒業を迎える時期となりました。理学部、科研、多元研と所属は変わりましたが、人の交流はそれほど多くは無い方だと思います。

職場と組合と知り合った人間関係は６対４くらいではないかと思いますが、いろんな方々に多くの財産をいただいてきたと感じています。特に関心を持ちました技術職員の待遇では全国の技術職員と一緒に勉強できましたし、大学法人化の時には賃金対策委員会で勉強できました。横手の静かな田舎の高校生から、東北大学という職場を選択して、関心を持てばいろんな可能性を秘めた環境はあったわけですが、これまで悔いのない人生と感じています。皆様、大変お世話になりました。

※病　金野嘉子さん

私は昭和50年４月に大学病院へ就職し、三思寮に住みました。はじめての職場は外科共同病棟で、同期は３名でした。その頃のことで記憶に残っているのは、職場の先輩が優しく、しっかり新人教育をしてくれた事、治療の途中で亡くなられた３人の患者さんの事、そして、約１年後には妹と病院の近くのアパートに住んだ事、そこに職場の先輩が組合加入の誘いに来て、働く者が組合に入るのは当然と思い加入しました。

病院長や看護部長交渉に、給食の方の問題や３年雇用の問題等で参加した事、活動の中で、本音で話せる多くの方々に出会えた事は私の財産です、今後も私にできることで組合活動に関わって行きたいと思います。長い間ありがとうございました。

人間らしい暮らしってなあに？

宮城はたらく女性のつどい

児美川孝一郎氏　法政大学教授

３つの点を話された。

まず一つは「フラッシュバックー この20年」小泉純一郎元総理が進めた構造改革は矛盾がでてきて政権交代したにもかかわらず元に戻りそうな情勢である。駅前はシャッター通り、大企業の下請け・孫請けのひどい実態、製造業の空洞化、高校生は就職できないから専門学校や大学へ進むが、中退が増加。日本の将来が不安と答える人は86％にものぼる。

二つ目「働き方はどう変わったのか」非正規職員はいつまでたっても非正規職員。一方正規職員は長時間労働でこき使われ、身体を壊してやめる人も多い。過去には正社員などということばはなかった。正規が当たり前、社員で通じた。

三つ目「『人間らしい暮らし』を取り戻すために」今の働き方は当然のことと捉えずに明らかに異常だということをもっともっと発言していこう。働き方を見つめ直していこう。ＩＬＯは日本に「人間らしい生活」をとずっと言っているが、日本の企業は労働者より、株主の配当金などばっかり考えている。政治を変えなければならない。ワークだけでなくライフも考えよう、自分たちで人間らしい働き方を考えていこう。

（編　Ｍ）

囲碁大会　1/11

新春のつどい　1/17

病院協議会総会報告

（病）中川佳子さん

2月1日、病院協議会総会で看護職の夜勤・交代制勤務に関するガイドラインについて学習会がありました。日本看護協会労働政策部看護労働課看護労働確保対策担当専門職奥村元子氏の講演でした。このガイドラインの基本理念は日本看護協会の倫理綱領に基づいています。看護者はより質の高い看護を行うために看護者自身の心身の健康の保持増進に努めるとうたっています。このことは、個人の努力だけで実現できるものでなく、労使がともに取り組むことで実現できるものです。中でも夜勤交代制勤務の17時間を超える長時間拘束の負担軽減は重要な課題です。しかし、労働者の同意なく無理やり一律の変更は望ましくありません。たとえば、すべての人が同じ勤務をすることが公平ということではなく、個々人が十分納得し、個々の状況に応じて夜勤のできる回数、勤務できる時間帯など働き続けられる条件をシェアしあい支えあうことも必要という話もありました。ガイドラインの中身を実現していくために組合も頑張る必要を感じました。